

松 山 大 学 論 集
第 24 卷 第 1 号 抜 刷
2012 年 4 月 発 行

手話関係者から見たろう者等の
生活のしづらさについて

——手話関係者への「ろう者等とのかかわりづらさに
関するアンケート調査」から——

玉 井 智 子

手話関係者から見たろう者等の

生活のしづらさについて

——手話関係者への「ろう者等とのかかわりづらさに
関するアンケート調査」から——

玉 井 智 子

I. は じ め に

近年、聴覚障害者、ろう者、中途失聴者等（以下ろう者等とする）に関する福祉は向上し、そのコミュニケーション手段の一つである手話は広く認知され、手話を学ぶ人々（手話人口）は拡大して、ろう者等への理解も普及しつつある。しかし、ろう者等の抱える「くらしづらさ」（社会的不利）は依然、存在している（全日本ろうあ連盟、2011）。

親子コミュニケーション経験の少なさからくる「聴覚障害児のくらしづらさ」については、聴覚障害児の手話による親子コミュニケーションや、手話をコミュニケーション手段とする地域生活に関する研究において、通じ合う手段としての手話がその改善に有効であり、通じ合う実感は、母親ら周囲の当該児に対する適切な評価（聴覚障害児に対する肯定的見方）への変化を促すなど、当該児との相互作用による良循環を促すことが示唆された（玉井、2010 他）。

このことから、本研究においては、成人ろう者等が抱える「くらしづらさ」について検討するために、彼らと通じ合う手段としての手話を介してかかわりのある手話通訳者や手話学習者等手話関係者（以下、手話関係者とする）に対して調査を行い、手話関係者のろう者等に対する見方（ろう者像）と、ろう者等とのかかわりづらさについて考察することを目的とする。

ろう者等のコミュニケーション手段である手話を理解、あるいは習得し、ろう者等との手話コミュニケーションが可能であり、現状としてろう者等とのかわりが継続されていると考えられる人々を、ここでは手話関係者と呼ぶこととする。一般的に手話関係者として考えられるのは、手話通訳者、手話学習者そして、ろう者等の家族関係等身近な存在である者などである。本研究では、ろう者等のくらしづらさについて検討することを主旨としているため、ろう者等がその周りを取り巻く健聴者等とどのようにかかわっているのか、その中でどのような思いを抱いているのか等に視点を定める。そのため「ろう者等が自身の家族、親族等身近な存在であり、かかわりとしては専らそのろう者等とのものみである」という者は調査対象から外すこととした。

手話通訳者について林は、「手話通訳に関して専門的な教育を受け、国や都道府県の行う試験に合格し、資格を付与された「人」である」としている(林, 2010: 62-63)。日本における手話通訳者の団体として、全国手話通訳問題研究会(以下、全通研とする)が挙げられ、全通研の前身は、全国ろうあ者大会に併設される形での第1回全国手話通訳者会議(1968年開催)であり、ここで手話通訳論として「ろうあ者の権利を守る」という手話通訳者の姿勢が示された。そして、第5回会議において手話通訳者の全国組織の形態について検討され、第7回会議において全通研結成総会という運びになる。全通研の会則には、「手話、手話通訳、ならびに聴覚障害者問題についての学習・研究活動を行い、手話にかかわる人々の組織化を図るとともに、財団法人全日本聾啞連盟の運動をはじめとする聴覚障害者運動と連帯し、もって聴覚障害者福祉と手話通訳者の社会的地位の向上を目指すことを目的とする」とある。1974年の結成総会時の会員数は284人、その後の1978年の全国調査では、「専任手話通訳者」は135人であり、そのすべてが会員であるということではなかったが、現在は47都道府県に支部を持ち、会員は1万人を超えている。このような背景から、専任、非常勤等を含め手話通訳者として手話通訳にかかわる者は少なからず全通研会員に加入している状況が想定される。

一方、手話学習者の多くは、手話通訳者の養成制度によって誕生している。手話通訳者の養成事業制度化は、都道府県身体障害者社会参加促進事業のメニュー事業として開始された手話奉仕員養成事業（1970年）に端を発している。当時の養成対象者は「身体障害者の福祉に理解と熱意のある主婦等」と位置付けられており、都道府県・政令指定都市の事業としての「手話教室」「手話講習会」等が開催され、のちに市町村障害者社会参加促進事業開始（1995年）後は、市町村においても手話講習会等が開催されることとなった。これらの国の事業等を基に、手話サークルが全国に広がっていった。全国第1号の手話サークルは、昭和36年に京都で結成された「みみずく」であり、全国各地における手話サークルの結成を基盤として全通研が結成されている。手話サークルは、手話通訳者の集団ではないが、ろう者等の暮らしと手話を学ぶところである。そして、手話サークルと全通研は団体としてそれぞれが独立しているが、全通研の会員の多くは、地域では手話サークル会員であることから、手話サークルが全通研を包み込む形で存在していると考えられている（山形、2010：51-55）。

このような背景から、手話関係者という位置付けにあたる人々は、手話通訳者、手話学習者等であり、彼らが所属する団体を全通研および手話サークルとすることが妥当であると考え、調査対象を全通研会員および手話サークル会員等とした。また、本研究においては、県単位の調査を基盤に、手話関係者のろう者等とのかかわりについて考察し、ろう者のくらしづらさ等の全体像について展望することとした。

Ⅱ．方 法

A県手話サークル連絡協議会（以下、サ連とする）および全国手話通訳問題研究会A県支部（以下、通研とする）の協力を得て、県内全域を対象としたアンケート調査を行った。アンケートは選択式と自由記述式の部分からなり、通研会員へは通研事務局より許可、提供された会員一覧に従い郵送し、サ連は各

地域サークル代表である役員にそれぞれの地元サークルへの配布を依頼する形でまとめて手渡しし、回答は郵送してもらう方法をとった。また、通研会員とサ連会員を兼ねている場合は、どちらか一方へ1回のみの回答とするよう依頼した。

内容は、現在の所属、通訳活動の有無、手話学習や、ろう者とのかかわりを始めたきっかけ、手話奉仕員等の養成講座受講の有無、ボランティア経験の有無、年代、手話やろう者へのかかわり以前と以降での印象の変化と、ろう者等との「かかわり」、手話関係者からみたろう者等の抱える困難等についての質問による構成とした。

また、A県下で手話サークル例会等の場に筆者が出向き、質問紙によるアンケート調査と参加者に直接質問を行い、自由に発言してもらう形の集団聞き取り調査の実施について受諾を得た3サークルに対して、追加調査を実施した。

アンケート等から得られた結果の分析にはICF国際生活機能分類（以下、ICFとする）を尺度として活用した。

Ⅲ. 結 果

1. 郵送式アンケート調査の結果（別添資料グラフ1～9）

アンケートは通研会員へは135通、サ連へは259通、合計394通を配布し、回答154通のうち、有効回答153通、回収率は38.8%であった。

アンケート回答者153名の所属は、「サ連」85名（55%）、「通研」18名（12%）、サ連・通研両方に所属（以下、「両方」とする）47名（31%）、所属なし3人（2%）であった。通訳活動の経験有無は、全体で「あり」52%、「なし」45%、所属別では「通訳活動経験あり」が「サ連」26%、「通研」67%、「両方」94%で、「通訳活動経験なし」が「サ連」69%、「通研」28%、「両方」6%であった。通訳活動経験年数は、全体で「5年未満」17.9%、「5年以上10年未満」12.8%、10年以上26.9%、「通訳経験あるが年数不明」24.3%、「以前はしていた」17.9%であった。

手話学習やろう者とののかかわりを始めたきっかけは、それぞれ「サ連」「通研」の順に、「手話に興味があった」37.6%、50%、「広報を見て」20%、16.6%、「誘われて」14%、5%、「ろう者等の知り合いがいた」「サ連」のみ該当者あり10%、「自身の病気等や、親族等身近な存在にろう者等がいる」14%、16.6%であった。「両方」の手話学習のきっかけは「手話に興味」38.2%、「広報を見て」25.5%、「ろう者等の知り合い」15%、「身近な存在」12.7%、サークル参加のきっかけは「手話に興味」23.4%、「誘われて」21%、「講習会等を修了したから」21%、通研参加のきっかけは「手話に興味」14.9%、「誘われて」38.2%となっており、全体を通して手話学習は、手話への興味や広報での募集を契機に開始されており、サークル加入は手話への興味を基盤に、講習会で学んだ経験等を向上させる目的等で、通研加入は仲間やろう者に誘われて、という背景がみられた。また、両方の回答には「仕事などで必要になった」が1割弱と少数ではあるが含まれていた。

また、サ連加入は講習会修了を機にという結果が見られたが、この手話講習会受講経験について全体では「サ連」「受講あり」52%、「なし」45%、「通研」「あり」78%、「なし」22%、両方「あり」98%、「なし」2%で、このことから、サークル加入は手話やろう者とののかかわりの入り口的位置を占めており、手話講習会を含めた手話学習や手話通訳活動等の経過でサ連、通研両方への加入がなされるという流れが示されており、サークルという大きな集合の中に通研があるという構図を裏付ける結果となった。

手話以外のボランティア経験は半数以上の61%が「ある」とした。回答者の年代分布は、20代2%、30代12%、40代18%、50代28%、60代31%、70代7%、80代0.6%であり、30代から40代が30%、50～60代が59%、子育て等が一段落つき、ボランティア等社会参加を検討する年代、40代以上が84.6%であった。

手話サークルや通研に加入する前と後では「手話の印象は変わったか」の問いには、全体の83%が「変わった」と回答し、その内容についての具体的記

述により、「ろう者のことばとして」以下6項目に分類された(表1)。

なかでも、最も多かった「手話は難しい、奥が深い」については、複数回答を含め56%に上り、その詳細分類では、「手話は難しい」42%、「奥が深い」29%が多く、他には、表現に関しての「表情が豊か」、そして通訳活動と交流活動との区別についての「通訳することと会話することは全く異なる」、手話習得について前者と逆方向の「思ったより簡単」「できると思う」などがみられた。

表1 手話に対する印象の変化の内容

ろう者のことばとして	・人それぞれ、年齢によって、生い立ちによって手話が異なる癖がある ・ろう者のことばで大切なもの なくてはならないもの	26 (20%)
手話を介しての友人・隣人として	・友人になれた 身近になった ・通じてうれしい、会話するのが楽しみ	12 (9%)
手話は難しい、奥が深い	・難しい、奥が深い、学んでもきりが無い ・表情が豊か、魅力あることば 便利だ、独立した言語だ ・健聴者の手話と、ろう者等の手話は違う ・通訳者の手話と交流時の手話は違う	73 (56%)
ろう者という人として	・個人差がある 社会的立場について考える	9 (7%)
自分自身について	・積極的になった 勉強時間が増えた ・通訳としての自覚が出来た	9 (7%)
取り巻く人々について	・手話に興味を持つ人の多さを知った	1 (0.7%)

また、手話サークルや通研に加入する前と後では「ろう者等の印象は変わったか」の問いには、全体の67%が「変わった」と回答した。その内容についての具体的記述により、「助けたい、役に立ちたいなど支援希望」以下7つの項目に分類された(表2)。

このろう者等への印象変化の結果からは、ろう者等に対して、これまで「怖い」、「暗い」、「特別視」等偏った見方をしていたが正しい見方が出来るようになり、知人から友人、仲間へと変化していく「遠い存在から身近な存在へ」の

表2 ろう者に対する印象の変化の内容

助けたい、役に立ちたいなど支援希望	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な情報は伝えたい、教えてあげたい ・お役に立てることがあれば頑張りたい ・不便があることが分かった、少しでも協力したい 	5 (5%)
友人・隣人・仲間など身近になった	<ul style="list-style-type: none"> ・会って話したい、話すと楽しい 身近になった、距離が縮んだ ・友になれた、気持ちが通じ合っている 1対1で普通に付き合える 	21 (21%)
健聴者とろう者等の文化の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・文化、常識が異なる ・ろう文化が難しい 	5 (5%)
学力・言語力について	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の能力が思ったより低い 情報が少ない、読み書きが難しい ・コミュニケーションの力は健聴者と変わらない 	4 (4%)
ろう者という人に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・個性豊かで優しい 生き生きと生きている ・健聴者と交流をもちたいと思っている人が多い ・常識が通じない 付き合い方が難しい 理解度を計りかねる 	38 (38%)
自分自身の見方・生き方	<ul style="list-style-type: none"> ・思ったより明るかった ・引きこもっているのかと思っていたら違っていた ・以前は怖い印象があった ・一人ひとりの個性を理解できた 	21 (21%)
聞こえにくいゆえの苦労など	<ul style="list-style-type: none"> ・健聴者にはわからない生活の困難さを知った 	2 (2%)

変化と、「自分から声をかけるようになった」「自分自身が交流に積極的になった」などの「自分自身」の変化という方向がまず見られた。そして、ろう文化の存在とその違い、ろう者という人を人としてとらえる視点での変化など、かわりを深める中で疑問や気づき、葛藤などが生じるという方向が見られた。この「ろう者という人に対して」では、「ひとりひとり異なる」「付き合いにくい」「通じにくい」などのかわり意欲減退の向きと、「生き生きしている」「明るい」「たくましい」「努力している姿に感動」などの意欲向上の向きとの双方が示された。

ろう者等とのかかわりについては、良循環（かわりやすさ）と悪循環（かわりづらさ）の二つの側面について質問した。良循環については、「ろう者等が自分に話している内容が目に浮かぶように自然に伝わってきて大変共感で

きた」以下5項目について質問し、その状況の有無と程度、そしてその内容についての自由記述で回答を得た(表3)。

「ろう者等が自分に話している内容が目に浮かぶように自然に伝わってきて大変共感できた」について、「よくある・たまにある」を合わせて、「サ連」86%、「通研」89%、「両方」93%で、その内容は「サ連」「通研」には「旅行

表3 ろう者等とのかかわり 良循環

	ろう者等が自分に話している内容が目に浮かぶように自然に伝わってきて大変共感できた		話や伝達事項が思う以上にすんなりと理解してもらえた	
サ 連	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の話, 楽しかったこと, 経験談(旅行記, 事実や出来事, エピソードなど) ・自分も同様の経験があること, 思い浮かぶこと, 共通の興味, 関心事 ・身振り手振りが上手, 大きい, 明確 ・表情豊か, 映像を見るようだ 	よくある・たまにある(86%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう者の方から想像(予想)して, 理解しようと努めてくれる ・単語だけ, 身振りだけでもわかってもらえた ・パズルのように単語を並べるとわかってくれた ・口話だけで通じた 	よくある・たまにある(81%)
通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・写像的表現, 映像で読み取るとき身振り, 表情が豊か, 旅行談, つらい体験 	よくある・たまにある(89%)	<ul style="list-style-type: none"> ・表情や雰囲気で察してくれた ・趣味関係や, 情報等をすでに収集している場合 	よくある・たまにある(89%)
サ 連 ・ 通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・体験談(とくに苦労, 辛い, 腹立たしいなど怒りを伴うもの) ・戦争体験, ろう学校の思いで, (寄・宿舍等), 生い立ち, ・子育て等の苦労話 ・上手な話しての手話は, 映像で理解できるので, 読み取りは不要だ 	よくある・たまにある(93%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう者等が経験済みの内容, 知っていること ・伝達方法を工夫する ・表情や雰囲気で察してくれた ・ろう者の理解力に助けられている 	よくある・たまにある(89%)

	ろう者等の方が良く知っていて, 的を得た説明をくれた		自分の気持ちや状況を酌んでくれ, 元気をもらった	
サ 連	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味関係 ・行動範囲が広い, 各地の様々な情報を知っている ・手話について, ITについて, 子育てについて 	よくある・たまにある(74%)	<ul style="list-style-type: none"> ・手話技術, 上達度, 手話勉強の仕方等について励ましてくれる ・病氣, けが等の時に励ましてくれる ・これまでの努力をねぎらってくれる 	よくある・たまにある(84%)
通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・健聴者側に経験のないこと, 当事者だからわかること ・趣味関係 	よくある・たまにある(89%)	<ul style="list-style-type: none"> ・病氣, けが等の時に励ましてくれる, 体の具合を気遣ってくれる ・相手の心をつかむ力がある 	よくある・たまにある(72%)
サ 連 ・ 通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・アナログ放送とデジタル放送の違いなど ・景色や, 建物の配置など ・テレビ, ニュースの情報, 先人の知恵など ・旅行の体験談や, 旅先の情報 	よくある・たまにある(87%)	<ul style="list-style-type: none"> ・忙しい時, 落ち込んでいるときなどにねぎらったり励ましたりしてくれる ・気を遣ってくれる ・明るくふるまってくれる 	よくある・たまにある(85%)

	ろう者等の社会生活における悩み、問題等が伝わってきたり、感じられたりした	
サ連	・クラクション、停留所の案内、災害時など音情報に関すること、 ・職場等社会における人間関係、子育てにおける苦労、文章理解等、コミュニケーション手段の違いによる不便	よくある・たまにある (74%)
通研	・クラクション、停留所の案内、災害時など音情報に関すること、 ・学校、医療現場等で冷たく対応される、障害者差別がある、身近に相談できる相手がない	よくある・たまにある (72%)
サ連・通研	・就労、職場でのコミュニケーション、対人関係、家族間の問題、老後のこと、近隣との付き合いがない、災害時の保障がない、通訳保障がない	よくある・たまにある (91%)

談」等が、そしてすべてのグループに「体験談」が含まれた。この「体験談」の内容は、「サ連」では「自分にもわかる経験」「楽しかったこと」「映像のようだ」であるが、「通研」では「つらい経験」が含まれ、さらに「両方」では「苦労、腹立たしい、怒りを伴う」や「戦争体験」「生い立ち」「子育て」など、「サ連」「通研」から「両方」へとグループにおける通訳経験者の占める割合が拡大するとともに、具体的で心情的には負の側面を含むものが多くなっている。

「話や伝達事項が思う以上にすんなりと理解してもらえた」について、「よくある・たまにある」が「サ連」81%、「通研」89%、「両方」89%で、その内容は、「通研」「両方」には、「ろう者が経験済みの内容」「情報等をすでに収集している内容」が見られ、すべてに共通して「ろう者のほうから予測して、理解しようと努めてくれる（「サ連」の自由記述から）」というような状況が含まれていることから、この設問の状況はろう者等からの積極的な理解努力もあって実現されるものであると考えられる。

「ろう者等の方がよく知っていて、的を得た説明をくれた」について、「よくある・たまにある」は「サ連」74%、「通研」89%、「両方」87%で、自由記述の内容は「趣味関係」「旅行先の情報」「コンピューターやインターネットに関すること」「ニュースなど出来事」と、どのグループにも共通した内容が見られるが、「サ連」の割合が他のグループと比較して低かった。

「自分の気持ちや状況を酌んでくれ、元気をもらった」については、「サ連」

84%,「通研」72%,「両方」85%で、その内容の自由記述は、「サ連」では手話の上達度や、手話学習への努力についてのねざらいがあり、すべてに共通して「病氣、けが等の時、気遣ってくれる、励ましてくれる」といった体調への気遣い、配慮が見られた。

「ろう者等の社会生活における悩み、問題等が伝わってきたり、感じられたりした」について、「サ連」74%,「通研」72%,「両方」91%で、「サ連」と「両方」の差が17%,「通研」と「両方」ではさらに大きく19%開いた。自由記述の内容では、「サ連」「通研」に共通して「音（声）情報」を収集できないことによる不便や苦労等が挙げられ、表現方法には多少の違いがあるがすべてに共通して「コミュニケーション方法が異なること」「手話通訳（制度）未保障」「身近に親しい人がいない（付き合いがない）」などによる孤立化の不安が挙げられている。このことから、ろう者等の社会生活における悩みとして、コミュニケーション方法が異なることで、周囲の人々との関係形成に困難が生じ、職場等での対人関係形成困難、災害時等非常時の情報収集困難や孤立化の危険性等を想定していることが示されたと考える。

次に悪循環（かかわりづらさ）については、「会話の途中で通じているかどうか不安になり、会話を控えてしまった」以下6項目についてその有無と程度、内容についての自由記述で回答を得た（表4）。

「会話の途中で通じているかどうか不安になり、会話を控えてしまった」について、「サ連」では「頻繁にある」18.8%「たまにある」51%（以下、「頻繁にある」「たまにある」の順に示す）、「通研」は11%,72%,「両方」は12.7%,55.3%で、所属にかかわらずこのような経験をしていることが示された。自由記述による内容をみると、やはり所属にかかわらず「読み取れない」「手話力が足りなくて言えない」「（音声語を）手話に置き換えられない」などの手話技術不足、未熟等を原因とした通じにくさが挙げられ、加えて「両方」では、「わからなくなっても話を止める勇気がない」という、ある程度の相互の関係形成がなされている状況でも悪循環が生じると推察される記述が得られた。

表4 ろう者等とのかかわり 悪循環

	会話の途中で通じているかどうか不安になり、会話を控えてしまった		質問や疑問を投げかけたが、ろう者等からの返答がそっけなかった。そのため、それ以降は同様の質問、疑問は控えている。	
サ 連	<ul style="list-style-type: none"> 相手の反応がない、読み取れない、返答がズレる 細かい説明を省く、どうしても必要である内容以外はおおざっぱになりがち 自分の手話が未熟 読み取れない、知らない単語が出てくるとわからない 言いたいことも手話力が足りなくて言えない 	たまにある (51%) 頻繁にある (18.8%)	<ul style="list-style-type: none"> 無視される、迷惑そうにされる、手話が下手だと馬鹿にされる 家族のこと、同障者、健聴者に対する好き嫌いについて 怒られた、嫌な顔をされた、きつい態度で言われた そんなつもりはないのに、不審そうにされた 嫌われたくない、深入りしたくない 	ある (34%)
通 研	<ul style="list-style-type: none"> 話がズレたとき、想定したのとは違う答えが返ってきた時 手話に置き換えられなかったとき、何度も聞き返せない、通じなくて気まずくなる 	たまにある (72%) 頻繁にある (11%)	<ul style="list-style-type: none"> 特定のろう者等については、ある 	ある (11%)
サ 連・ 通 研	<ul style="list-style-type: none"> 自信がない時、わからなくなっても話を止める勇気がない 手話が早すぎる、読み取れない ろう者等の思い込みが激しいとき 手話技術が未熟である、詳しい内容を伝えられない 	たまにある (55.3%) 頻繁にある (12.7%)	<ul style="list-style-type: none"> 機嫌が悪い、同障者、健聴者に対しての好き嫌いについて プライバシーに関することや仕事の内容 家庭のこと、料金、費用などお金に関すること、 ろう文化と健聴文化の違い 	ある (32%)
	何らかの話題で話をしていたが、話がズレて、そのズレを修正できなかった		出来事や話題について「これを話したいな」と思うが、同時に「通じないかも」「通じないだろうな」「わかりやすい伝え方や話し方が出来ないな」とあきらめてしまうことがある	
サ 連	<ul style="list-style-type: none"> 平易なことばが選べない、話が長くなってしまったとき。文字で伝える、ろう者のプライドを考えて修正しない 世界観が違う、ろう者によって表現が異なる あきらめる、重要でなければ放っておく、なんとなくやむやになる 	たまにある (55%) よくある (18.8%)	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身の手話技術が低い、未熟なため、日本語に対応させた手話しかできない、指文字もゆっくしかできない 細かい説明、難しい単語はできない、簡潔に伝えないと理解できない 文化が違うのでいつも平行線 	たまにある (44.7%) 頻繁にある (22.3%)
通 研	<ul style="list-style-type: none"> 自信がない、途中でわからなくなる 気持ちが伝わっていないと感じる、経験が共有できない内容は通じ合えない 	たまにある (78%) よくある (5%)	<ul style="list-style-type: none"> 話が膨らまない、自信がない、あきらめる どう表現したらいいのかわからない、相手が未就学の場合 	たまにある (72%) 頻繁にある (5%)
サ 連・ 通 研	<ul style="list-style-type: none"> 反応や返答が外的になる、感覚がずれる、こちらの意図が伝わらない こちらが先取りしすぎたとき、中途半端に手話をした時など 	たまにある (64%) よくある (10%)	<ul style="list-style-type: none"> 相手が興味のない話はあきらめる、詳細を伝えられない、情報提供したいが、簡単にしてしまう、筆談に切り替える マルチ商法等に関する一般の知識や常識的判断などを伝えたいが、ろう者等がかたくで伝わらなくなった 	たまにある (47%) 頻繁にある (15%)

	通訳場面など、ろう者等に何らかの内容を伝達しなければならない場面で伝達してもらわねばならないが、それができそうにないと感じることがある		日常生活上の様々な内容について、ろう者等から尋ねられる内容について、意外だ、あるいはどうしたら良いかと悩むことがある	
サ 連	<ul style="list-style-type: none"> ・専門用語、新しいことば、日本語独特の言い回し ・健聴者の笑いのポイントを共有してもらえない伝え方が出来ない ・事故等の責任の所在とその理由、背景等 ・体験したことがない内容を理解してもらえない、かたくなところがある ・ろう者等それぞれに理解度が違うので、複数のろう者等に一齐に伝える場合は困難 	たまにある (27%) 頻繁にある (33%)	<ul style="list-style-type: none"> ・対人関係における礼儀、信頼関係 ・好き・嫌いに関すること ・文章の意味がわからない、誤解して受け取り、ショック等受けてしまうなど ・健聴者の社会のルールと異なる時がある ・考え方にずれがある 	たまにある (41%) 頻繁にある (14%)
通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう者等が使いこなせる言葉の量が少ない ・「もし～ならば」など展望を持った内容が難しい ・詩歌や俳句、医療場面 	たまにある (55.6%) 頻繁にある (16.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ・対人関係、相手に対する礼儀、距離感等 ・物事、事象の始まりと結果だけ把握でき、経過については知らないことが多いので、その場になじめず浮いてしまう ・保護者間のメール連絡で、誤解が生じる 	たまにある (55.6%)
サ 連 ・ 通 研	<ul style="list-style-type: none"> ・医療場面（一般的な常識的理解とされること＝病識や薬の知識に乏しく、理解できない、イメージできない） ・落語など話芸、通訳者の技術不足、自分に経験がないことは伝えられない ・対象となるろう者等が集団の場合、ろう者等が集中できなくなってしまう 	たまにある (49%) 頻繁にある (10.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ・儀礼、慣習など、漢字の読み方、福祉手当等、制度に関すること、人間関係、マナーに関すること、相手との親密度、距離感に関すること ・家族、宗教 	たまにある (34%) 頻繁にある (15%)

「質問や疑問を投げかけたが、ろう者等からの返答がそっけなかった。そのため、それ以降は同様の質問、疑問は控えている」について「ある」と回答したのは、「サ連」では34%、「通研」は11%、「両方」は32%で、1割から3割程度と全体的に低い数値であったが、内容についての自由記述では、「手話が下手だと馬鹿にされる」「迷惑そう」「いやな顔をされる」などの会話の対象である健聴者の自分自身に対するものと、「家族、同障者、健聴者に対する好き嫌いについて」という、ろう者を取り巻く周囲に対するものが挙げられた。

「何らかの話題で話をしていたが、話がズレて、そのズレを修正できなかった」については、「サ連」では「たまにある」55%、「よくある」18.8%（以下、「たまにある」「よくある」の順に示す）、「通研」は78%、5%、「両方」は64%、10%で、内容についての自由記述では、「サ連」の場合は「平易なことが選べないとき」「話が長くなってしまったとき」というような、音声語を手話に置き換える際に「ズレ」が生じると感じているのに対して、「通研」では、「自信がない」「気持ちが伝わっていない」「経験が共有できない内容は通じ合えない」など、やりとりしながらも心中に不安を抱えている様子が表わされている。さらに「両方」では「反応や返答が的外れになる」「感覚がずれる」「意図が伝わらない」など、健聴者側からのアプローチとしての問題点、言い換えれば「サ連」や「通研」から挙げられた、表出手段である手話等について自信がないなどの不安等問題意識よりも、受け手であるろう者等の受け止め方、伝わり方等に対して困難を感じていることが示唆された。

「出来事や話題について「これを話したいな」と思うが、同時に「通じないかも」「通じないだろうな」「わかりやすい伝え方や話し方ができないな」とあきらめてしまうことがある」については、「サ連」では「頻繁にある」22.3%、「たまにある」44.7%（以下、「頻繁にある」「たまにある」の順に示す）、「通研」は5%、72%、「両方」は15%、47%であり、内容についての自由記述では、「細かい説明や難しい単語はできない」「自信がない」「詳細を伝えられない」など、どのグループにも共通して手話表現では具体的な、あるいは細部にわたる説明を求められた場合に遂行できない可能性がある、あるいはそうなることを危惧しているということが示された。加えて、「文化が違う」「話が膨らまない」「相手が興味のない話はあきらめる」という受け手側のろう者等と健聴者側との間に存在する壁や、「興味のない話は通じにくい」という一見当然のように思えることではあるが、「通じ合う」ための相互作用の課題の存在が示された。

「通訳場面など、ろう者等に何らかの内容を伝達しなければならない場面で

伝達して理解してもらわねばならないが、それができそうにないと感じることがある」については、「サ連」では「頻繁にある」33%、「たまにある」27%(以下、「頻繁にある」「たまにある」の順に示す)、「通研」は16.6%、55.6%、「両方」は10.6%、49%という結果となり、その内容の自由記述では、「サ連」では「新しいことば、専門用語などを表現するとき」「手話技術不足」「言葉を置き換えられない」「日本語独特の表現」といった、手話と音声日本語との言語変換時の困難が主体であり、「通研」は「医療場面」「専門用語」「詩や俳句など文化的な内容」というメッセージの送り手(健聴者)側の困難に関するものと「ろう者等の文章理解力が乏しい場合」「健聴者は当然知っている知識(病識等)をろう者等が知らないため、説明しても理解を得にくい」といった健聴者、ろう者等双方の困難についての記述が見られ、「両方」では「技術不足・知識不足」という自身の手話力に原因があるとする困難に加えて、「医療場面」「専門的なテーマでの講演会」「話芸、漫才等」といった記述が見られた。このことは、手話通訳の対象範囲の広がり、ろう者等の認識・理解度等に対して、手話通訳を担う通訳者の技術や知識、経験等が対応しきれていない現状を表していると考えられる。

「日常生活上の様々な内容について、ろう者等から尋ねられる内容について、意外だ、あるいはどうしたらよいかと悩むことがある」については、「サ連」では「頻繁にある」14%、「たまにある」41%、「通研」は「たまにある」55.6%、「両方」は「頻繁にある」15%、「たまにある」34%というどのグループにも平均して5割程度が「ある」という回答であった。内容についての自由記述では、「相手に対する礼儀等」と「好き・嫌い」「人間関係、相手との親密度」という対人関係形成に関する困難、「文章の意味がわからない」「漢字の読みがわからない」などの日本語力に関するものなどが見られた。

くらしづらさそのものの背景となると考えられる「職場、学校、自治会等近隣との付き合いなどの社会生活場面におけるろう者等の悩みや状況、困難等について、見たり聞いたりしたことがあるか」という問いには、全体で54.3%

が「ある」とし、その方法としては「実際に見た」「ろう者以外から聞いた」「ろう者本人から聞いた」の順に多くなっている。自由記述によるその内容では、「自治会活動に入っていけない」「近所づきあいが無い」「地域の活動に参加できない（疎外感）」「職場で仲間に入れない」などのろう者自身が健聴者主体の集団に参加しづらいというもの、「昇給がない、就職面接を拒否されるなど、就労における差別」「『ろう者に車の免許を持たせるな！』と車の事故で相手に怒鳴られた」などの、ろう者に対する周囲の無理解や差別観が原因となっているもの、「ドアの開閉音、静かな場所でする雑音、講演中などに携帯の着信音を平然と鳴らしてしまうこと」などのろう者自身の、（健聴者中心の）社会生活（適応）技術に関するものが挙げられた。

上記の問いを受けて、このような社会生活場面における困難を抱えながら、ろう者等自身が日々を生きていく状況を見て、健聴者である自分自身はどのように感じているか、と問うたところ、「損だ」「下手だ」「未熟だ」を合わせて33.3%であった。その内容としての自由記述では、「表情や物言いがストレートで反感を買われる」「地域の人々の情報を得ようとする積極性がない」「情報の偏り」「ろう者等も健聴者等も互いについてあまりにも知らない状態だ」などが見られた。

かわりづらさに影響を及ぼす環境因子の状況を掴むため、手話関係者の立場から見た環境整備やサービス拡充の必要性について以下の3問を設定し、記述式で回答を得た。

「ろう者等にとってどのようなサービスが必要であるか」と対しては、「リアルタイム文字情報提供等の情報保障」「無制限の手話通訳派遣等手話通訳保障」「医療機関、公共施設、商業施設等いつでもどこでも手話でのやり取りを可能に」などの「知る権利」を保障するためのサービスが最も多く、全回答者の3分の1を占めた。次に「災害時、緊急時の通訳保障、情報保障」、ろう者への日常生活上必要なマナーや服薬方法等一般的知識の勉強会等を含む「ろう者（児）に対する教育」と、手話学習を義務教育課程に盛り込むなどの

「健聴者（児）に対する教育」、そしてデイサービス、手話のできるヘルパー派遣等「ろう高齢者へのサービス」、コミュニケーション確保を前提とした「就労支援」が挙げられ、少数意見では、周囲にろう者であることが分かるようにという「ろう者であることの表示」や「ろう者同士のつながりの場の保障」、「手話通訳者の質の向上」なども見られた。

「ろう者にとってどのような立場や役割を担っているか、担いたいのか」については、「手助けをしたい」「サポートしたい」「手伝ってあげたい」「コミュニケーション支援がしたい」「力になりたい」などの「支援者として」や「情報提供者」、「手話通訳者」という聴覚障害等によって生じる不自由や不便等を軽減する役割を担うものと、「ろう者等が気楽に話せ、頼れる相手」などの「信頼される相手」や「困っているときに共に考える」などの「相談相手」、気軽にコミュニケーションをとる「話し相手」、「良き隣人」「励まし合い、なんでも語りあえる」などの「友人・仲間」といったろう者等との対等な関係を主体とした役割、そして、健聴者との間をつなぐ「パイプ役」といった回答が得られた。少数意見として、働きやすい職場環境づくりなど「環境整備を担う役割」や、ろう運動をともに行うなどの「協力者」、地域の中での気軽な「交流を担う役割」、ろう者や手話についての「理解者」なども見られ、中には「手話通訳者となると、友人関係は維持できにくい」という、手話通訳者の役割と友人等の役割の両立の難しさを示す意見も見られた。

「今後必要とされる環境整備はどのようなものか」について、最も多いのは「手話通訳者の身分保障」であった。自由記述の中には、「技術面では手話通訳者は高度なものを要求されるが、身分はボランティア並みである」「このままでは担い手が育たない」「職業として成り立ってほしい」など切実な訴えが見られた。そして手話と手話通訳者については、手話通訳者育成、養成に関する「養成の場の確保、拡充」や、手話を使える人を増やすなどの「手話人口拡大」、手話のできるスタッフを増やすなどの「手話通訳者の拡大」、そして、義務教育等で手話授業を盛り込む、ろう教育に手話を、などの「手話教育及びろう教育の向上」

が挙げられた。また、就労の場だけでなく、地域生活等も含めた「機会均等」、健聴者、ろう者等合同で、あるいはそれぞれが集う場としての「交流の場の拡大」、視覚に訴える情報提示など「ユニバーサルデザインの導入」など「バリアフリーに関するもの」が見られた。そのほか、ろう者や手話関係者に対する社会の認知度の低さを指摘する内容の「理解拡充」を訴えるものも見られた。

2. 手話サークルでの参加型アンケート調査の結果

A県内で活動する手話サークルで、参加型アンケート調査依頼を受諾した3か所において、質問紙調査及び集団聞き取り調査を行った。全参加者の中で質問紙による回答が得られたのは70件であった。

回答者の内訳は、下記のとおりである。男性5人(7%)、女性65人(93%)、年齢別内訳10代4人、20代4人、30代11人、40代14人、50代12人、60代16人、70代4人、80代1人、無記入4人で、10代から40代の層(以下、若年層とする)と、50代以上の層(以下、中高年齢層とする)がともに47%であった。活動年数は、1年未満19人(27%、うち若年層42%、中高年齢層58%)、1年以上～3年未満10人(14%、うち若年層90%、中高年齢層10%)、3年以上5年未満8人(11%、うち若年層37%、中高年齢層62%)、5年以上10年未満10人(14%、うち若年層70%、中高年齢層30%)、10年以上22人(31.4%、うち若年層27%、中高年齢層73%)で、活動年数に年齢層は比例しない結果となった(別添資料グラフ10)。

「サークルはあなたにとってどのようなものか」というサークルの位置づけに関する問いには、手話やろう者等を理解する場、「文化教室的」な位置づけ、「生活の一部」あるいは「楽しみ」などが見られた。「サークル参加の目的(目標)」については、手話学習目的、交流目的に大きく二分された。

「ろう者等とかかわってから気づいたり知ったりしたことはあるか」に対しては、自身が想像していたろう者像と異なる印象であるというもの、社会生活におけるバリアについてのもの、「誤解したままになることが多い」「心を通わ

せるのは難しい」などのろう者との関係形成における困難についてのものが見られた。

「ろう者等について「大変だ（苦労だ）なあ」と思うことはあるか」については、音情報を得る上でのバリアや、「人間関係で誤解を招きやすい」「文章力が足りない」などの困難が挙げられた。

「ろう者とともに豊かに楽しく暮らすために必要なことは何か」という問いには、「手話人口の拡大」「情報保障」に加えて、「ろう者、健聴者の相互理解」や「交流」「寂しく、孤独に陥っている人をなくす」「交流する場の確保」に加えて、「健聴者がろう者等を理解できるようにするための健聴者向けの情報提供」が見られた。

「ろう者や手話に対してどのような存在でありたいか」に対しては、相棒・パートナー的な存在になることを希望する意見が見られた。

「ろうあ運動」についての認知とかかわりの有無を問う問いには、「（講習会などで講義を受けてなど）少しだけ知っている」「知っている」を合わせて回答者60人のうち33人（55%）、「知らない」は18人（30%）であった。そしてろうあ運動へのかかわりについては「少しだけ」「積極的に」あわせて14人（23%）、「かかわっていない」が13人（21.6%）であった。

Ⅳ. 考 察

1. かかわりづらさの内容

(ア) ICFの項目を活用した分類（具体例～アンケート調査自由記述から）

手話関係者へのアンケート調査で得られたろう者等とのかかわりづらさは、その要因によって手話通訳者側を主体とするものとろう者等側のものとに分けられる。手話関係者側の内容は、手話習得、手話でのやり取りに関するもの（活動制限）、ろう者等との関係形成および維持に関するものと手話通訳者（士）や支援者等としての役割遂行（参加制約）、自身を取り巻く環境（手話関係者との関係等）に関するもの（環境因子）、手話

やろう者、聴覚障害等に関する知識（個人因子）に分類された。ろう者等側の内容は、学習と知識の応用、対人関係、セルフケアなどの活動制限、対人関係、地域生活等と、親としての役割遂行等の参加制約、手話やろう者、聴覚障害等についての社会の認識不十分などの環境因子、経済面へのこだわりやろう文化の主張等個人因子に分類された（表5、表6）。

表5 手話関係者から見たろう者等の ICF 分類表

ろ う 者 等	活動制限	学習と知識の応用（思考、計画、学習能力、問題解決等） 対人関係 セルフケア（健康に関する注意など）
	参加制約	対人関係 コミュニティライフ（自治会、地域行事等への参加） 親として等の役割遂行（保護者、PTA 活動など）
	環境因子 （阻害因子）	手話の未普及、社会の認識不十分 手話通訳に関する福祉制度の制限、未整備 情報未保障、情報提示不十分などのバリア 就労に関する差別や不均等 ろう教育はじめ、教育関係 ろう高齢者向けサービス不十分など
	個人因子 （阻害因子）	金銭面等への固執等、ろう文化、感覚のズレ 個々の成育環境や経験の差が激しいなど

表6 手話関係者の ICF 分類表

手 話 関 係 者 等	活動制限	手話でのコミュニケーション
	参加制約	手話通訳者、手話通訳士としての活動 仲間として 支援者として 友人として 隣人として
	環境因子 （阻害因子）	ろう者等の対応、ろう文化とされるもの 感覚の違い、ズレ 手話通訳者（士）等手話関係者等との相互関係
	個人因子 （阻害因子）	ろう者等についてあまり（ほとんど）知らない 手話についてあまり（ほとんど）知らない

（イ）ICF 分類による分析

上述(ア)で挙げられたかかわりづらさの背景にある事象や感情等を、ICF（国際生活機能分類、以下 ICF とする）を用いて、図式化し整理する（図1、図2）。

図 1 手話関係者から見たろう者等の ICF 図

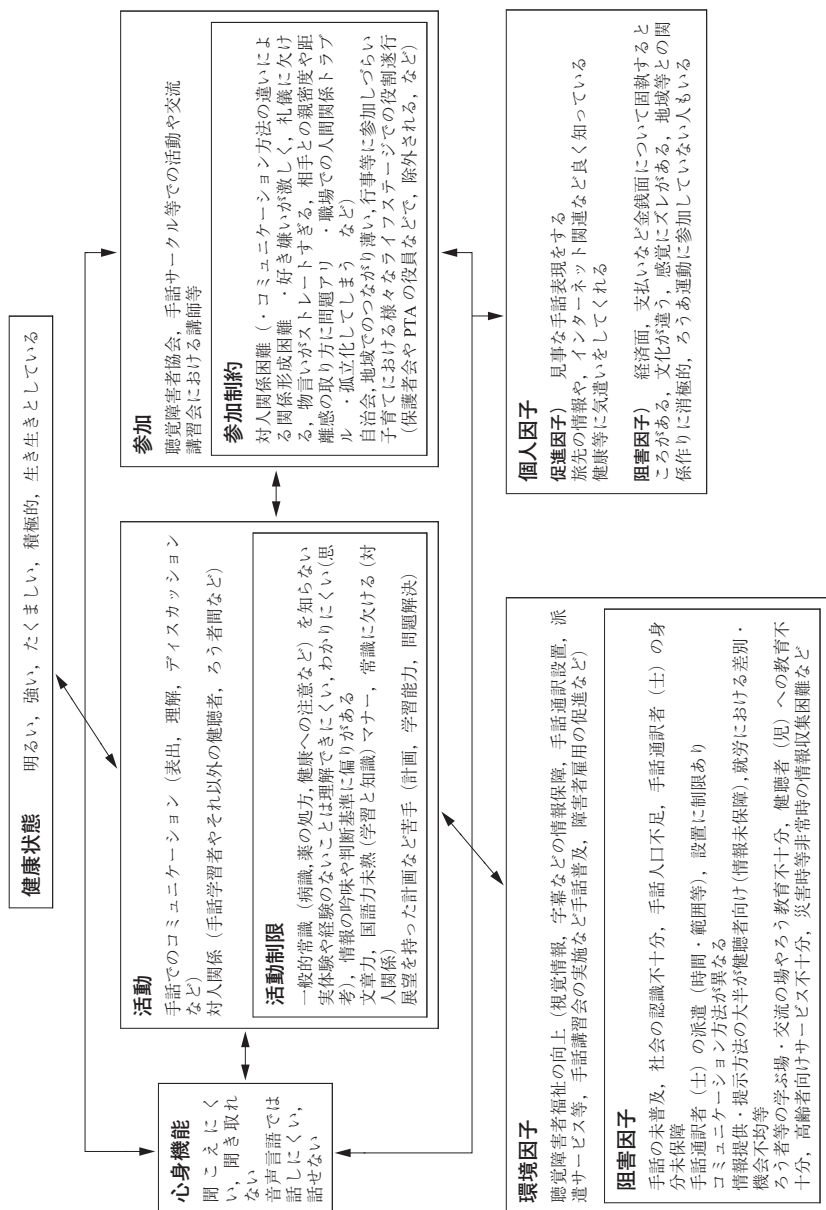
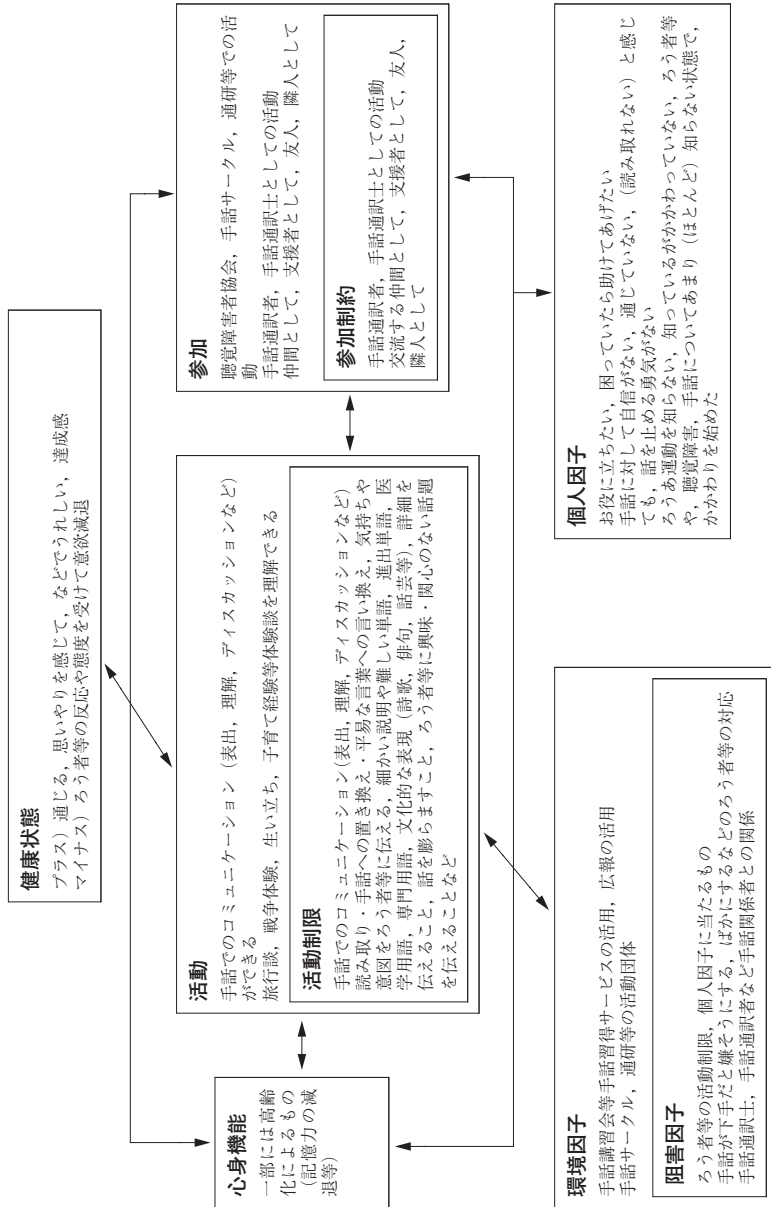


図 2 手話関係者等の ICF 図



手話関係者から見たろう者等の活動と参加の状況は、手話を用いたコミュニケーションは可能だが、学習と知識の応用や対人関係、コミュニティライフなどに制限・制約があり、そこへ環境因子の手話の未普及や社会のろうや聴覚障害に対する無認識、手話通訳者不足、健聴者、ろう者等への教育不十分などが阻害因子化して影響を及ぼし、これが相互作用となって悪循環化し、参加制約を増大させる可能性があると考えられる。そして個人因子とされる、健聴者から見たところのこだわりや感覚のずれ、独自の文化等がより一層健聴者との距離を広げるなど悪循環を増大させる可能性がある。

また、手話関係者自身は、手話習得・手話でのコミュニケーションに関する活動制限や、ろう者等の通訳者、仲間、支援者としての参加制約に、環境因子に含まれるろう者等の活動制限と個人因子、手話関係者同士間の関係が阻害因子化して影響を及ぼし、加えて手話関係者自身の自信がない、知識がないなどの個人因子と相互に影響しあって活動と参加の困難が増大し手話やろう者とのかわりそのものが減衰するなどの悪循環化の可能性が考えられる。

2. かかわりづらさに影響を与える要因

(ア) 言語としての手話習得

アンケートにおいて「手話に対する印象の変化」を尋ねた結果、「変わった」と回答した人の自由記述を見ると、「日本語が話せるだけではだめだ」「国語力、表情が必要」「奥が深い」等を理由に「実際にろう者等と話すのは難しい」「読み取りが難しい」状況にあり、「思っていたより数段難しい」「一生かかっても習得できない」という結論に達したという流れが見られる。もちろん難しさをプラスに転じて、「通じるとうれしい」「興味を持つようになった」などの意欲向上につなぐ場合もみられるが、ここでの問題点はまず、手話は市民権を得つつあるという近年の認識は、手話という言

語の存在について、単語単位で認識しているという程度のものであったのではないかということである。言い換えると、講演等で演者の横の通訳者を見て、あるいはろう者等を登場人物に配置したテレビドラマ等を見て、わが子が小学校等で手話コーラス等を習ってくる、などして認識するという程度のものであろうということである。

次にこれらの認識を根拠にすると、なぜ手話は「もう少し簡単にできると思った」のかという点である。手話の成立はろう学校の誕生と歴史に応じた年代とみなされるとされ、日本の場合は明治 11 年の京都盲啞院が最初のろう学校であり、創設者である古河太四郎が、ろうの子どもたちの教育に手話や手話に至る前段階の手話（前手話）を利用したことが知られている。しかし、大正末期の口話教育の台頭とともに手話は、「人間のことばではない、下等なもの」「手話を使うとことばが身につかない」などと蔑視の対象とされ、ろう学校での使用が禁止されるなど苦難の時代を経験した（高田，2010：52-66）。また、障害を悪しきものとし、訓練等による克服を目指す「医療モデル」（北野，2003：59-60）や「正常化論」により（上農，2003：224）、ろう者等および手話に対する否定的見方は増大した。

しかしながら、本研究アンケート回答者の「通訳経験 10 年以上」だったのは 26.3%，サークル調査でも 31.4%であり、手話やろう者へのかかわりのきっかけは半数以上が「手話に興味」「広報を見て」だったこととあわせて、上記の歴史を踏まえての参加であったとは考えにくい。小学校等での福祉教育における手話体験や、テレビ番組への手話通訳ワイプ挿入、NHK 教育「みんなの手話」などによる手話の認知の高まりと相まって、「手話に興味」を持ったと考える方が妥当であろう。加えて、手話関係者の年齢層が高いことから、その背景には、聴覚障害に限定せず、障害に対する否定的感情（定藤，2003：1-27）が存在し、そのうえで、障害者等に対する社会の見方の変化とともに自らも「手助けしたい」という意識変化を経て、手話習得に至ったと考えれば、手話について音声日本語を

基礎に何らかの身振りの動作を補助的に加えたものだと思えたとしても不思議ではない。このことについて木村は、これまで音声（口話）付きで手話表現をするという方法がメディア等で取り上げられてきたことが、手話に対する誤った認識の拡大を助長することになったとしている（木村，2011：37-44）。

これらのことから、手話という言葉についての正しい認識を普及させ、「想像よりも難しい」という違和感による手話敬遠等を解消するための情報提供と手話習得機会提供方法について、検討する必要があると考える。

（イ）手話関係者とろう者等との間に生じる違和感

① ろう者等と手話関係者の意識変化

手話関係者の「活動と参加」に対する阻害因子となっているろう者等の否定的なものを含めた態度や反応，ろう者等との感覚・意図等のズレ，通じにくさなどは，手話関係者がろう者等とのかかわりにおいて感じる緊張感を伴う違和感とも言えるだろう。ろう者等を対象とした福祉制度等が未整備だった時代と現在とでは，手話関係者やろう者等の互いに対する印象に変化は生じているのだろうか。

全日本ろうあ連盟や，全国手話通訳問題研究会の活動の記録には，手話を知らない健聴者が手話を覚え，ろう者等の不便や，苦しみを理解し，ともにろうあ運動に参加する過程が記されている（全日本ろうあ連盟，1998，全国手話通訳問題研究会，1994）。また昭和40年代後半から各地に設立された手話サークルの当時についての記録にも，健聴者等とろう者等が通じないながらも互いをわかり合おうとして苦心しながら活動を重ねた状況が示されている（手和の会，2011）。全通研，手話サークルどちらも，ろう者等の権利を守るためのろうあ運動に，ろう者等とともに参加，行動する中で，手話を習得する経過が示されている。

また，これまでの日本のボランティアに対するイメージは，「タダ」「自

己犠牲」「おせっかい」というマイナス的な印象が強く（筒井のり子，1995：21-23），活動者側からのイメージは「「ほっとかれへん」「がまんできへん」というおさえきれない思いに突き動かされてボランティアになる」のだという（大熊由紀子，2008：3）。

本研究聞き取り調査では，現在活動している手話関係者のうち「ろうあ運動」についての認知度は，「知っている」「少し知っている」を合わせて55%であった。「知った」方法については，「講習会等で」「サークル学習会で」などが挙げられた。

手話関係者は，手話通訳者等として業務に就く以外は，活動区分で見ればボランティア活動者であると言えるだろう。しかし彼等のボランティア活動への参加動機は「興味」「広報を見て」が多くを占めており，それは「ろう者等の苦労や，彼らを取り巻く環境に様々なバリアが現存することについて知ったのは，講習会やサークル等学習会，およびろう者等とのかかわりにおいてである」との回答からもうかがえる。加えて，それらの社会的不利の是正を目的としたろうあ運動についても前述のとおり約5割強が認識しているに留まっている。手話関係者の現状は，「困っているろう者等を手助けしたい」という気持ちで，社会に存在する様々なバリアについて学び，バリアや格差の是正や，ろう者や手話についての啓発・啓蒙活動を目的とした行事等活動に参加するといった大枠での方向性は以前と変わらないが，制度化等による聴覚障害者福祉の向上，手話の市民権獲得，障害者就労状況改善等を経た現在において，手話禁止やろう者等への差別という逆境に立ち向かい，当事者とともに運動してきた先達の状況から変化しつつあると考えられる。

一方でろう者等も，いまだ不十分とはいえ手話通訳制度や情報バリアの改善など，聴覚障害者福祉が向上する中で，一人ひとりが権利主体者としての自覚をもち，明確な運動の意思をもって強力な連帯意識を基盤とした組織運動を推進するという状況は困難になりつつあるとされる（安藤，

2005:193-205)。

これらのことから、現状はろう者等、手話関係者双方の共通認識として「ろうあ者の生活を高め、権利擁護の理念を具現化する」(全日本ろうあ連盟, 1991) という目標を掲げる必要性が見えにくくなり、それぞれの活動参加目的が多様化しつつあると考える。

② ろう者等と手話関係者の思いのずれ

石川は、ろう者等と手話関係者の手話通訳制度確立を目的とした運動実践における矛盾について、ろうあ協会等当事者団体の「手話学習者はろうあ運動に協力するのが当然」「ろうあ者が困っているのに助けられないのか」などといった批判や、「ろうあ協会と手話サークルの関係を指導―被指導の上下関係にとらえている」などの例を挙げ、それらがこれまで積み重ねられた手話通訳制度確立を目的とした聴覚障害者集団と手話通訳者集団の運動の一方で問題となっていると指摘している。そして解決の方向を見出すために、両者に民主的関係の成立への努力の必要性を訴えている(石川, 2000:26-31)。

アンケート調査自由記述には、「(ろう者等の) プライドを傷つけたくないの、話のズレを指摘しない」や、「(ろう者等に) 嫌われたくないの、(誤り等を指摘しない)」という手話関係者側の複雑な心境を表す意見も見られた。

このことは手話の広がりや制度化による福祉向上の一方で、「ろうあ者の権利を守る」意味や方法、その効果の変容と、それに伴う健聴者と障害者間の関係変化によって生じる問題について示していると考ええる。

③ 手話関係者から見たろう者等の活動制限と、参加制約

手話関係者から見たろう者等の活動制限について、ろう者等の「一般的知識(病識等)の不足」「文章力・国語力未熟」「マナー・常識に欠ける」

等と思考や計画，学習の能力，問題解決能力等に関するものについての困難が指摘された。参加制約については，「対人関係困難」を基本とした地域生活や職業生活における困難が指摘されている。

野沢は，「聴覚障害者にはコミュニケーションと情報入手に関して，「コミュニケーション保障がない，緊張が強い，気配りばかり，国語力・ことばが不十分，コンタクトがすぐにとれない，孤立しやすい，コンプレックスをもつ，コンチクショウとすることが多い」という 8K がある」とし，能力不全克服のためには，早期教育の徹底と生涯教育の必要性及び重要性を述べている（野沢，1994：161-162）。

ろう学校への手話導入や早期教育の充実等は長期にわたりろう教育の課題とされており，ろう者によるろう教育も試みられている（ベターコミュニケーション研究会，2008）。一方成人となって社会生活を送るろう者等への生涯教育については，昭和 47 年に国の事業として開始された「ろうあ者日曜教室」などがある（障害者明るい暮らし促進事業：現在は障害者社会参加推進事業）。

「国語力」や「知識不足」については教育の充実や情報保障による改善が期待されているが，「対人関係」と手話関係者との間の「感覚のズレ」「意図が伝わらない」「未経験の事象は伝わらない」等については，聴覚障害がもたらす二次的三次的障害による困難と評価するのか，困難ではなくろう者の文化への無理解や手話関係者等の手話の技術未熟等に原因があるとするのかについて，いまだ方向性が示されていない。手話関係者としても，困難であるなら手助けしたいがろう者等の否定的反応に違和感を感じる，あるいは手話の未熟さやろう文化であるならば，解決や改善を見出す術について指標が示されていないなど，彼ら自身に対応に迷う状況が生じており，このことがよりかかわりづらさを強める方向で影響を与えていると考える。

(ウ) ろう文化について

ろう文化は、「手話を使用するろう者の独自の文化」と定義され（原，2008：240-242），日本におけるろう文化としては1995年に木村，市田により「ろう文化宣言」として紹介された（木村，市田，2000）。ここで示された「ろう文化」および「ろう者は障害者ではない」という言説に対しては，熟考を求めるなどさまざまな意見がある（神田，長瀬ら，1996）。

星加は，障害者に対する文化運動的な読み換えの試みについて「障害の文化」という切り口での分析の流れがあり，モリスと山田の定義を引用し，『障害について障害者自身が肯定的で独自の意味付けを行っている過程に焦点があてられ』，『障害に対する社会からの否定的な価値づけを転換することで肯定的なアイデンティティ形成を図る手段として，「文化」という解釈枠組みが有効に機能しうることが指摘される』としている（星加，2007a：306）。そして障害の読み換え戦略の好例として「ろう文化」を挙げ，ここでも「ろう者は障害者ではないという言説には批判が生じている」としつつも，手話という言語を操る「少数民族」という解釈枠組みを調達し得たことが，『ろうという障害による差異に付与された「否定性」を反転させ』る挑戦を有利に導いたとしている（星加，2007b：307）。

そして木村はろう者と健聴者の文化の違いについて，時間に関する感覚，あいさつ，応答の仕方など対人関係におけるマナー等などの例を挙げている。手話通訳者を含めた健聴者が対人関係における社会的慣例や状況に見合った社会的に適切な方法として用いる行為等について，その一つ一つがろう者にとっては「落ち着かない」「しっくりこない」「腑に落ちない」とし，時にはそれが「不快感を与える」ほどであると述べている（木村，2007：128-245）。

一方，ろう者と健聴者の「ことばのズレ」による誤解やすれ違いを取り上げ，両者の「ズレ」はそのままに，「知って認める」ことこそが必要であるとする意見もある（関西手話カレッジ，2009：89-90）。

文化とは、「ことば、技術、社会関係、価値・態度など、学習を通してある集団の構成員によって共有される意味の体系である」と定義されている（松尾，2011a：47）。

上記のように「ろう者は障害者ではなく、ろう文化をもつ言語的少数者なのだ」とする場合、ろう者等に対する社会福祉的支援は不要となり、現在の手話奉仕員養成事業をはじめとする手話や聴覚障害者への理解促進を目的とした事業は意義自体がなくなり、現在サ連、通研等で活動、学習している手話関係者は福祉的ボランティア活動者からは外れることになるのか、という問題が残る。手話関係者の多くはろう者等との関係について「支援者」「友人・隣人・仲間」という立場を希望しており、またろう者等の障害による不自由や社会的不利について実感し、環境整備の必要性を述べている。手話関係者らはろう者等に対して「聴覚障害という障害をもつ人々である」と認識し、彼らの音声言語環境下での生活や多数者を占める健聴者社会での生活のしづらさを理解し、自らが手話を学び、必要な情報提供等をするなど支援をしたいと考えている。このような手話関係者等の背景に目を向ければ、「通じづらさ」「わかりづらさ」の理由が「ろう文化」に置換されることや、その無理解に対する批判に対して、容易には理解しづらいという違和感を覚えるであろうことは推測できる。加えて、ろう者等という少数者が健聴者という多数者の下で不便を強いられているという見方に対応するには、手話関係者としての姿勢や活動の方向転換等、再考が必要となる場合も考えられる。そしてこの違和感がろう者等との間に「異者観」や「通じにくさ」を強め、手話習得への意欲減退などの関係形成困難を増大させる可能性があると考ええる。

3. 手話関係者からみたかかわりづらさ

本研究におけるアンケート調査から、手話関係者がろう者等に対して通じにくさやわかりづらさなどから成るかかわりづらさ、そしてろう者等を取り巻く

環境に対して情報保障等改善の必要性を感じていること、手話習得の困難さを感じながらも手話学習やろう者等とのかかわりに喜びややりがいを感じ、意欲向上させていることが示された。

手話関係者のかかわり等活動継続および新たな手話学習者の手話学習困難経験の改善のためにも自治体等委託事業として開催されている手話講習会等による手話学習方法や聴覚障害及びろう者等についての知識・理論学習方法について検討の必要性が考えられた。

また、ろう者等や聴覚障害者等と手話関係者等健聴者間のコミュニケーションという相互作用や関係性の向上には、共生という前提での通じ合うための歩み寄り、わかりあうための努力の必要性を含めて多文化主義（松尾，2011b：114-117）や運動と教育の再考（八木，2000：33-40）の視点の検討も必要となると考える。

ろう者等と健聴者等の関係性についての研究は少ないのが現状であり、今後ともさらに研究継続したいと考える。

本論文は平成22年度松山大学特別研究助成「ろう者等のくらしづらさについて」の研究成果の一部である。

引用・参考文献

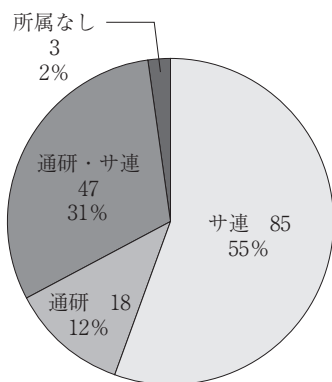
- 財団法人全日本聾唖連盟 2011 「聴覚障害者の福祉施策への要望について」
- 玉井智子 2010 「聴覚障害児と健聴母親の手話コミュニケーションについての一考察」『松山大学論集』第22巻 第5号 151-176
- 林智樹 2010 『「手話通訳学」入門』クリエイツかもがわ 62-63
- 山形恵治 2010 「全通研と手話サークルの誕生を振り返って」『手話通訳問題研究』114 51-55
- 高田英一 2010 「手話の成立と発展」『聴覚言語障害者とコミュニケーション』中央法規 52-66
- 北野誠一 2003 「障害者の自立生活と自立生活支援」『現代の障害者福祉』改訂版 定藤丈弘，佐藤久夫，北野誠一編 有斐閣 59-60
- 上農正剛 2003 『たった一人のクレオール』ポット出版 224

- 定藤丈弘 2003 「序章 障害者福祉の基本的思想」『現代の障害者福祉』改訂版 定藤丈弘、佐藤久夫、北野誠一編 有斐閣 1-27
- 木村晴美 2011 『日本手話と日本語対応手話（手指日本語）』生活書院 37-44
- 財団法人全日本ろうあ連盟 1998 『50年の歩み』全日本聾唖連盟出版部
- 全国手話通訳問題研究会 1994 『翔びたて全通研 20年のあゆみ』全国手話通訳問題研究会
- 手和の会 2011 『ともに歩んで』大和郡山市手話サークル手和の会緑綬褒章受章記念誌
- 筒井のり子 1995 『ボランティアコーディネーター』大阪ボランティア協会 21-23
- 大熊由紀子 2008 『恋するようにボランティアを』ぶどう社 3
- 安藤豊喜 2005 「ろうあ運動」『21世紀のろう者像』全日本ろうあ連盟出版局 193-205
- 財団法人全日本ろうあ連盟 1991 「手話サークルに関する指針」
- 石川芳郎 2000 「手話通訳士制度の確立のために」『手話通訳問題研究』71号 全国手話通訳問題研究会 26-31
- 野沢克哉 1994 「聴覚障害者と聴者のコミュニケーションを深めるために」『新しい日本観・世界観に向かって』ジョン・C・マーハ、本名信行編 国際書院 161-162
- 特集「明晴学園開校」2008 いくおーる No.79 ベターコミュニケーション研究会
- 原順子 2008 「ろう文化」『聴覚障害児・者支援の基本と実践』奥野英子編 中央法規 240-242
- 木村晴美 市田泰弘 2000 「ろう文化宣言～言語的少数者としてのろう者」『ろう文化』青土社
- 神田和幸 1996 「ろう文化を考える」現代思想 vol.24-05 69-75
- 長瀬修 1996 「〈障害〉の視点から見たろう文化」現代思想 vol.24-05 46-51
- 星加良司 2007a 2007b 『障害とは何か』生活書院 a306 b307
- 木村晴美 2007 『日本手話とろう文化』生活書院 128-245
- 関西手話カレッジ 2009 『ろう者のトリセツ聴者のトリセツ』～ろう者と聴者の言葉のズレ～ 星湖舎 89-90
- 松尾知明 2011a 2011b 『多文化共生のためのテキストブック』明石書店 a47 b114-117
- 八木晃介 2000 『「排除と包摂」の社会学的研究』批評社 33-40

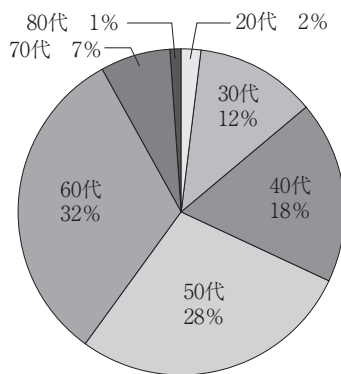
〈別添資料〉

アンケート調査 基本項目 結果

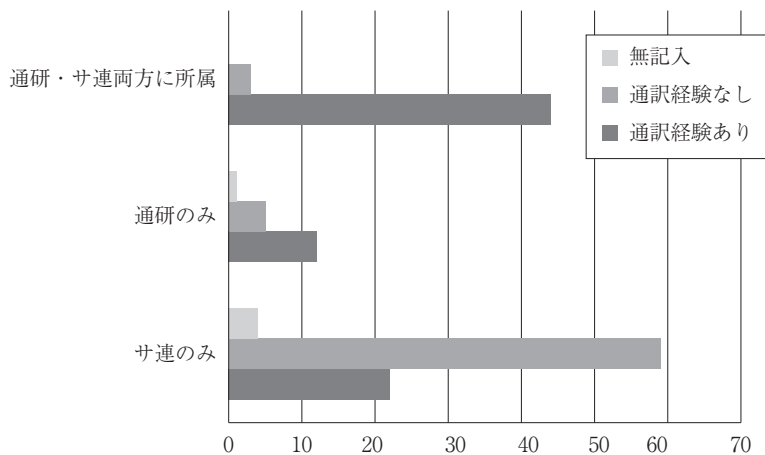
1. 回答者内訳



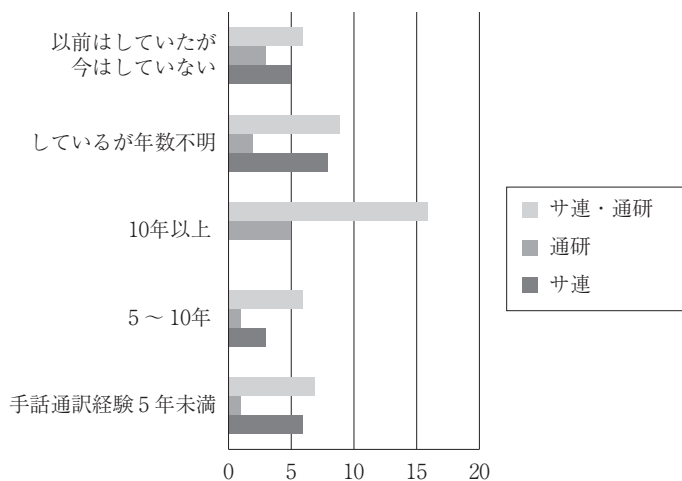
2. 年代分布



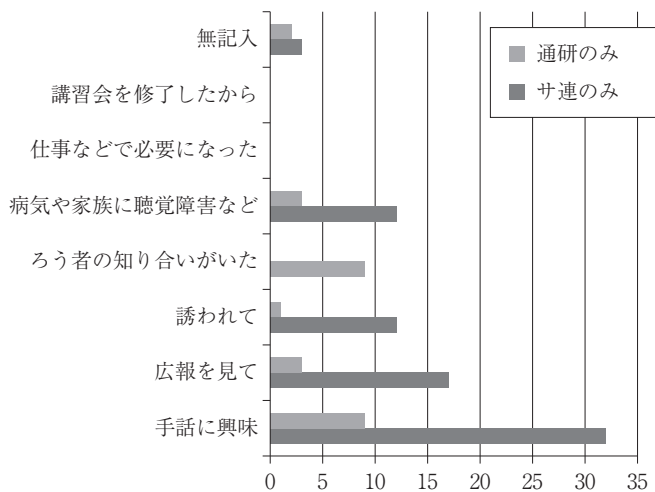
3. 所属と手話通訳経験の有無



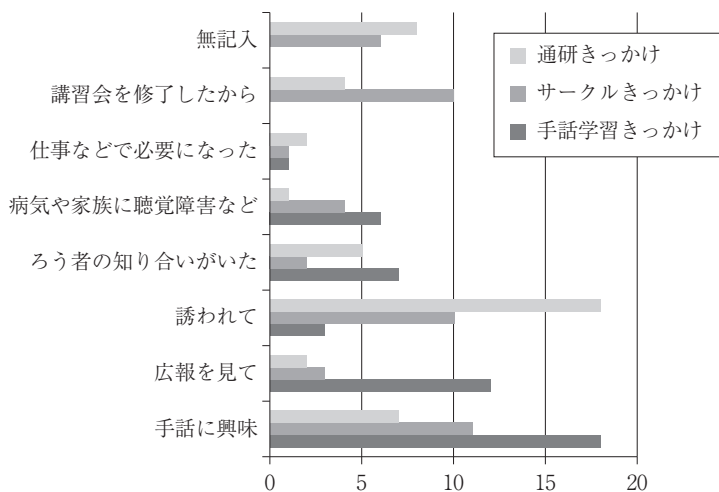
4. 手話通訳経験年数



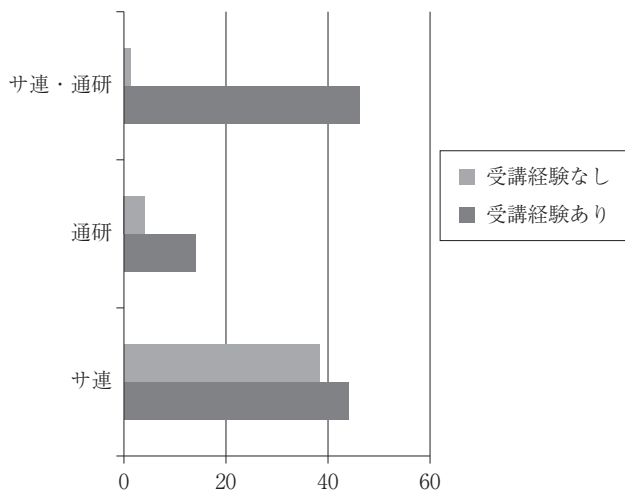
5. サ連と通研、各加入者の手話学習及びろう者等とのかかわりのきっかけ



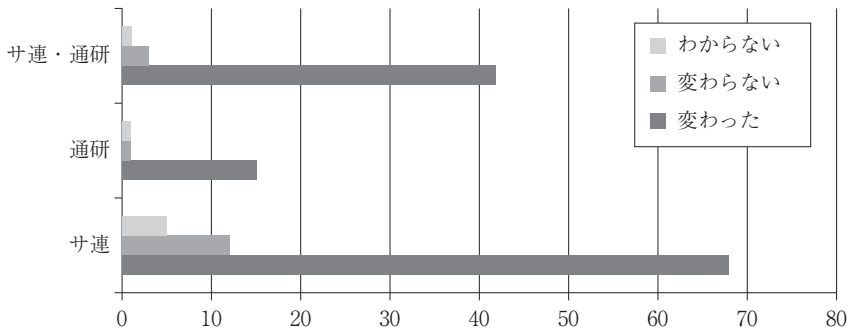
6. サ連・通研両方加入者の手話学習及びろう者とのかかわりきっかけ



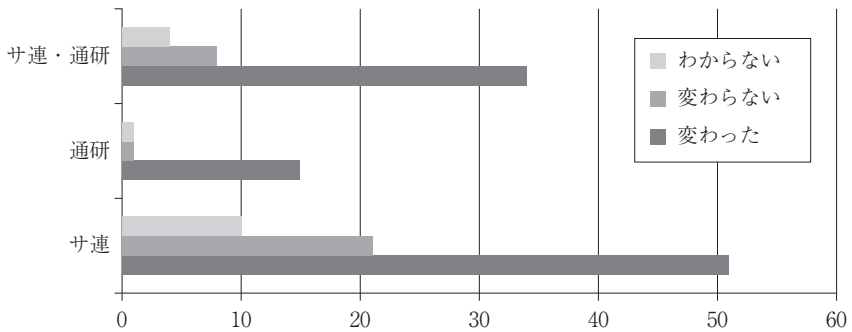
7. 手話講習会等受講経験の有無



8. かかわり開始前, かかわり経験後で手話の印象は変化したか



9. かかわり開始前, かかわり経験後でろう者等の印象は変化したか



10. サークル直接きき取り調査

回答者年代分布

